1　作　　物

項　　目	作　　業　　内　　容
	（今月の作業のポイント） ○早期・短期水稲の管理 ○普通期水稲の管理 ○大豆の管理 ７月 20 日高松地方気象台発表の１か月予報では、向こう１か月の気温は高く、降水量・日照時間は平年並の見込みである。
（１）早期・短期水稲の管理	ア　水管理 早期・短期のコシヒカリ、あきたこまちは登熟期となる。 この時期は間断かん水が基本であるが、田面を乾かし過ぎると品質が低下するため、湿潤気味の管理（飽水管理）に努める。再入水の目安は、田面の足跡に水が残っている状態である（写真１）。適度な土壌水分を保つことによって、根の健全化を図る。 写真１ 飽水管理における再入水の目安 落水を早めすぎると、葉での光合成能力が低下し籾の充実が不十分となり、くず米が多くなるので、落水時期は、収穫の５～７日前を目安とする。 イ　収穫適期 収穫始めの時期は、早期コシヒカリは最長稈黄変籾率 75%、籾水分 25～30%、短期あきたこまちは最長稈黄変籾率 85%、籾水分 25%である（出穂期後の積算温度 850～1,050℃程度、出穂後日数 33～38 日頃）。ほ場観察のうえ、適期収穫に努める。 ウ　乾燥・調製 この時期は温度、湿度が高く、品質が低下しやすいので、乾燥・調製にあたり次の点に留意する。 生籾の長時間堆積（４時間以上）は品質低下を招くため、収穫後は速やかに乾燥する。乾燥温度は 40℃以下、毎時乾燥速度（乾減率）は平均 0.8%以下とし、過乾燥を防ぎ、仕上がり水分 14.5～15%を目標とする。

項　　目	作　　業　　内　　容
	なお、高水分籾(25%以上)の場合は水分ムラが多いので、張り込み後はできるだけ早く送風を始め、５～６時間以上経ってから通常の熱風温度より５℃低い温度で乾燥し、水分20%以下になってから通常の熱風温度で乾燥する。 籾摺前に機械の事前点検を行い、肌ズレ等の品質低下に注意する。
（２）普通期水稲の管理	普通期水稲は、幼穂形成期から出穂期を迎える。穂肥は、ひめの凜、にこまるで出穂 20 日前（幼穂長２㎜）を目安に実施する。ヒノヒカリは未熟粒が発生しやすいので、弱勢穎花の着生を抑えるため、出穂 18 日前（幼穂長８㎜）に施肥を行う。幼穂長の見方については「今月の農作業７月」を参照する。施用量は 10ａあたり窒素４kg、カリ４kgを基準とし、葉色により調整する。 この時期は水稲が最も水を必要とする時期であるため湛水管理とし、田面を乾燥させないように注意する。また、この時期は台風の接近・上陸が増える時期であるので、台風情報等に注意し、強風による高温・乾燥が予想される場合には品質と収量の低下を軽減させるために深水管理とし、強風が収まってから落水する。 なお、斑点米カメムシ類は畦畔での発生密度が高いので、ほ場周辺の雑草を出穂 15 日前までに除草する。
（３）大豆の管理	ア　かん水 ７月上・中旬は種のフクユタカで８月中・下旬頃に開花期を迎える。大豆は水分要求量が高く、特に開花期以降は多量の水を必要とする。この時期の乾燥は花ぶるいや着莢不良による減収、青立ちによる収穫遅延を招く。そのため７～10 日以上降雨がなく、最先端葉が立ち上がり反転して白く見えるような場合（写真２）は、うね間かん水を行う。なお、高温時のかん水は根傷みを起こすので、朝夕に実施し、かん水後は速やかに落水する。 写真２　うね間かん水の目安（左）と　葉の反転（右）

項　　目	作　　業　　内　　容
	イ　病害虫防除 ○ハスモンヨトウ 　８月中旬以降、被害が拡大するので、白化葉（ふ化直後幼虫が群がって加害している被害葉）の早期発見と除去に努め、若齢幼虫期の防除を基本にする。また、薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統の薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。 ○カメムシ類 　吸汁加害によって着莢が阻害され、減収や青立ちによる品質低下の要因となるため、ほ場周辺の除草に努めるとともに開花終期から子実肥大期にかけて２回程度防除を行う。 ○紫斑病 　種子が侵されると紫斑が現れて品質が低下する。中山間地帯で発病しやすく、莢伸長期以降に降雨が多いと多発する。発生防止には開花後 15～50 日の間に１～３回防除を行う。ベンゾイミダゾール系薬剤（トップジンM剤、ベンレート剤）耐性菌が一部で確認されているので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

（作成　農林水産研究所）